

連載⑫(最終回)

内海善雄の  
(ITU元事務総局長)

やぶ睨み  
「ネット社会」論

# 世界共通語が話せる 若い世代に託する日本の未来

各国が「戦争だ」と言っている未曾有の

コロナウイルス危機に対しても、日本ではその場限りの付け焼刃の対策ばかりで、まるで戦略がない。コロナウイルス対策は、感染者を隔離することに尽きるが、そのためには、①感染者の発見のための検査体制の確立と隔離のための施設の確保が、まず、第一である。

隔離に失敗して市中にウイルスが蔓延した場合、②人々の接触を回避するため封鎖などの措置を取らなければならない。経済活動を強制停止させる場合は、補償をしなければ、危機が終わった時の再開が困難になり、社会は壊滅する。③そして、再感染を防止するためのワクチン等の開発や確保、というのが骨子となる。

このような大きな流れに沿った国家戦略を立てなければならぬ。が、どれをとっても全くと言ってよいほど、後手、後手に回っていることはご承知の通りである。

今まで人気のなかったリーダーが戦略的なコロナウイルス対策を打ち立て、国民の支持を拡大している国が多いのに対し、日本は真逆である。これは、現政権のリーダーたちの資質もさることながら、日本人特有の理由も

本稿の投稿で、「やぶ睨み」ネット社会論は百二十七回目となる。十年と七カ月である。

当初は、一般人があまり経験しない国際社会で見聞したことを述べればよいと思ったが、そんなネタはそう多くはない。結局、身近な事象に対して感想を述べさせていただけのことになった。このような場を得たことにまことに感謝の念に堪えない。

## 1 戦略がない

さて、この十年間に感じたことを一言で総括すれば、「日本は、もう少し欧州的な『したたかさ』を身に付けて、世界に伍して大いに発展してほしい」ということだろうか。新型コロナウイルス危機に面して、日本社会の特徴が一気に凝縮して現れ、思いをより一層強くしたところである。

あるように思う。

地理的にも歴史的にも躍動するヨーロッパでは、勝ち抜くための生存競争に勝てなければ国家の存続すら危うい。必然的に戦略と素早い行動が重要になるが、狭い空間の中で仲間とだけで仲良く生活してきた島国の日本では、勝ち抜くための戦略よりも、人に好かれるためのゴマすり術のほうが有用なのである。しかし、そんなありがたい状況はとづくに終わっている。

この度は、危機に面して若手の首長たちの活躍する姿が注目された。右顧左眄する政府やエスタブリッシュメントを尻目に、果敢に独自のコロナウイルス対策を打ち出し、実行していったのだ。日本にも人材はいっぱいいる。チャンスさえあれば、大いに活躍することだろう。

## 2 発言しない

未曾有の事象に接すると民衆は前が見えず右往左往する。それを正しく導くのがリーダーの役目。しかし、安倍晋三首相をはじめ各大臣の発言がほとんどない。新型コロナウイルス対策を担当する西村康稔経済再生担当大臣や若い





首長だけが毎日テレビに顔を出すのは異常事態か、それともこれが日本の普通の姿か。

コロナウイルス危機の横では、中国、北朝鮮、ロシアなどをめぐる緊迫した国際情勢がある。さらに、中国ICT産業の世界覇権に米国が非常手段をもって対抗している時、日本の方針が奈辺にあるのかも不明。甚大な自然災害が現実になってしまった環境問題も同様である。

今ほど国家としても、また、リーダーとしても、立場を明確にし、主張して世論を形成し、行動しなければならぬ時だが、多くは「沈黙は金なり」の音なしの構えである。産業界も然り。だから日本人はInscrutable（不可解）と言われる。

テレビ・タレントとタレントまがいの学者の無責任発言に民衆は煽らされ、世界各国か

らは無視されている日本だが、意識だけはまだ先進一等国だから、おめでたい。

村度や以心伝心の村文化は、グローバル社会では通用しない。臆することなく声高に主張できなければ、世界からは無視されるだけだ。

### 3 柔軟性がない

世界は、日々刻々変化する。そのスピードはドッグイヤーからマウスイヤーになって久しい。朝令暮改は当然の世界になっているのに、臨機応変に行動することができない。

アベノマスクもマスク入手困難だった発案時点では、立派な施策だったが、マスクの入手が容易になると無用となった。無用になれば直ちに廃止する柔軟性がなければならぬ。

Go Toキャンペーンも疲弊する観光業界のためには意味があるだろうが、第二波が押し寄せてきている時期に強行するのは、愚かさを超えて狂気の沙汰となる。

原典は「君子豹変す」が、日本では「君子豹変せず」となる。そして、「議論が長く決定が遅い。しかし、いったん決定したら、とことんまでやり、信頼できる」と嘲笑されるのが定番の国際評価だ。

### 4 自分で考えない

総理は、「世界で称賛される日本方式」と自己画賛したが、強制力のない政府の外出規制

要請などに従順に従う日本人を海外ではどのように見たらだろうか。三文映画によく出るシン、狂気の博士が世界征服を狙う基地の島のロボットのような兵隊たちをイメージしたのではないだろうか。

テレビでは街の人が「政府は、どうすべきか明確に指示してほしい」と望む声が多く聞こえる。香港では、死の危険を冒しても自由を守ろうと戦っているのに、なんと日本では自ら自由意思を放棄したがる人が多い。お上や世間に従っていけば楽な社会だからだろう。そんな社会の枠には合わない「異端者」や「変わり者」こそが、これからの日本を発展させる原動力になるのではないだろうか。

世界は、何といっても近代国家として長い歴史のあるヨーロッパが主導している。グローバル化が進む中、日本人も、彼らに理解される行動をとらなければ、対等に伍してはいけません。しかし、随所に世界共通語が話せる（日本流に言えば彼らと同程度の「厚かましさを持つ）若い世代が散見される。彼らが活躍する時、日本が再び翻る時だろう。（完）



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東郵通策任。66年郵政省入省。電気通信省(現総務省)入省。放送総局長企業など。98年国際電気通信連合(ITU)事務局長。電力・自動車関係大学教授。IEEE名誉会員。